





























国指定史跡 先島諸島火番盛（遠見番所）

宮古島市5ヶ所（池間・狩俣・島尻・砂川・来間）
指定年月日 平成19（2007）年 3月23日

江戸時代、鎖国体制下の1644年に、薩摩藩支配の琉球王府によって設置された、海上交通の監視・通報（烽火）機能をもった遠見番所跡群。先島諸島は琉球列島の最西端に位置し、東シナ海の緊張に直面しており、対外関係と鎖国体制の完成を示す遺跡として重要。

池間遠見番所

池間島南端の小高い丘陵上にあつて、はるか東方には大神島が、南方には平良の街が望見できるところにある。この遠見は岩盤を利用して円柱状に造られ、登り降りするための石段が数段設けられている。この遠見には昭和25～26年頃まで、船の位置を確認するためのビーイイス（方位石・直径20cm、高さ55cm・円柱形）が設置されていた。琉球（沖縄）で各諸島に烽火が始められたのは尚賢王時代（1644年）である。伝承によれば、この遠見には庶民からなる遠見番が輪番で任務に就き、沖縄本島を往還する上国船の航行を見守るとともに、近海を通過する船、異国船、漂流船の発見・監視等に当たったといわれている。そして、海上に船影を発見すると昼間は烽火（のろし）をあげ、夜間にはたいまつをかざして麓元へ合図を送ったということである。

又、遠見の北東方に見えるスタテイ嶺にはスタテイ番（庶民の輪番制で2人に割り当てられたといふ）が夜とおし火をたいて近海を通過する船の航海安全に備えたと言われている。このスタテイに関しては「ウヤキマースミカ」の歌謡も残っている。

















いけしま
県選択無形民俗文化財「池間島のミャークツツ」

選択年月日 昭和56(1981)年1月26日

毎年旧暦8月～9月の甲午の日から3日間にわたって、4カ所のムトゥ
(^{まじや}真謝・^あ上げ柵・^{ます}前め屋・^{まえ}前里)を中心に行われる池間島最大の祭祀である。
各ムトゥの祭儀は、55歳以上の男性で構成されるムトゥヌウヤ達を中心
に年齢階梯的組織で運営される。期間中、各ムトゥに所属するムトゥヌウ
ヤ達は、早朝4時～5時ごろムトゥに集まって、酒を酌み交わしながらひ
とときを過ごす。2日目早朝には、前年のミャークツツ以後生まれた乳児
を家族がムトゥの祭祀集団のメンバーとして登録するためのマスミイの
祭儀がある。また、この日は老若男女がウバルズ御嶽に参拝する。男性が入
れるのはこの日だけである。夕方真謝ムトゥを先頭に、各ムトゥヌウヤ達が
池間と前里の境界にある水浜の広場の所定の位置に座り、ツカサンマ達に
よるクイチャーが踊られたあと、ムトゥヌウヤ達ははじめ、一般参加者をま
じえたクイチャーが盛大に演じられる。



























































































